

十年

中島敦

青空文庫

十年前、十六歳の少年の僕は学校の裏山に寝ころがって空を流れる雲を見上げながら、「さて将来何になつたものだろう。」などと考えたものです。大文豪、結構。大金持、それもいい。総理大臣、一寸ちよつとわるくないな。全くこの中のどれにでも直ぐすになれそうな気でいたんだから大したものです。所でこれらの予想の外ほかに、その頃の僕にはもう一つ、極めて楽しい心秘かなのぞみがありました。それは「仏蘭西フランスへ行きたい。」ということなのです。別に何をしに、というんでもない、ただ遊びに行きたかったのです。何故特別に仏蘭西をえらんだかといえ、恐らくそれはこの仏蘭西という言葉の響きが、今でもこの国の若い人々の上にもつている魅力のせいでもあつたでしょうが、又同時に、その頃、私の読んでいた永井荷風の「ふらんす物語」と、これは生田春月だか上田敏だかの訳の「ヴェルレエヌ」の影響でもあつたようです。顔中
到る所に吹出した面砲にきびをつぶしながら、分つたような顔をして、ヴェルレエヌの邦訳などを読んでいたんですから、全く今から考えてもさぞ鼻持のならない、「いやみ」な少年だつたでしょうが、でもその頃は
大真面目で「巷に雨の降る如く我の心に涙」を降らせていたわけです。そういうわけで、僕は仏蘭西へ――
―わけても、この「よひどれ」の詩人が、その酒場でアプサンを呷りあお、そのマロニエ

の並木の下を蹣跚ばんさんとよろめいて行つた、あのパリへ行きたいと思つたのです。シャンゼ

リゼエ、ボア・ド・ブロンニュ、モンマルトル、カルチエ・ラタン、……学校の裏山に寝ころんで空を流れる雲を見上げながら幾度僕はそれらの上に思いを馳せたことでしょう。

さて、それから春風秋雨、ここに十年の月日が流れました。かつて抱いた希望の数々は顔の面皔と共に消え、昔は遠く名のみ聞いていたムウラン・ルウジュと同名の劇団が東京に出現した今日、横浜は南京町のアパートでひとり侘しく、くすぶっている僕ですが、それでも、たまに港の方から流れてくる出帆の汽笛の音を聞く時などは、さすがに、その昔の、夢のような空想を思出して、懐旧の情に堪えないようなこともあるのです。そういう時、机の上に拡げてある書物には意地悪くも、こんな文句が出ていたりする。

ふらんすへ行きたしと思へど

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広を着て

気ままなる旅にいでてみん……

「ははあ、この詩人も御多分に洩れず、あまり金持でないと見えるな。」と、そう思いながら僕も滅入った気持を引立てようこの詩人に倣ならつて、（仏蘭西へ行けない腹癒はらいせに、）

せめては新しき背広なりと着て、——いや冗談じゃない、そんな贅沢ができるものか。せめては新しき帽子——いや、それでもまだ贅沢すぎる。ええ、せめては新しきネクタイ位で我慢しておいて、さて、財布の底を一度ほじくりかえして見てから、散歩にと出掛け行くのです。丁度、十年前憶えたヴェルレエヌの句そのまま、「秋の日のヴィヲロンの、溜息の身にしてみても、ひたぶるにうらがなしい」氣持に充^{みた}されながら。

青空文庫情報

底本：「日本近代随筆選 1 出会いの時〔全3冊〕」岩波文庫、岩波書店

2016（平成28）年4月15日第1刷発行

底本の親本：「中島敦全集第二巻」筑摩書房

1976（昭和51）年5月25日初版第1刷発行

初出：「學苑 第二號」

1934（昭和9）年3月20日発行

入力：法川利夫

校正：岡村和彦

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十年

中島敦

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>